

## アジアにおけるグローバリゼーションと教育の相互関係

アンジェラ・W・リトル  
ロンドン大学教育研究所 (IOE) 名誉教授

### 背景

20世紀末以来、グローバリゼーションやその要因、発現、影響や、グローバリゼーションが約束するもの、またグローバリゼーションによりくすぶる不満などに関してしばしば議論されるようになった。グローバリゼーションは単に「モノ、サービス、資本、ヒト、アイデアが国境を越えて急速に移動すること」と説明されるかもしれない。市場、資本、ヒト、アイデアが国境を越えて広がることは、かつての帝国主義や植民地主義の時代の特徴でもあったが、本講演では主に、1960年代末から70年代にかけて始まった最近のグローバリゼーションについて取り上げる。

グローバリゼーションについて考えるとき、その発現と根本的な要因を区別しなければならない。市場、資本、ヒト、アイデアの国境を越えた広がり、グローバリゼーションの表れと考えられるかもしれない。グローバリゼーションの要因は経済政策、特に1990年代以来、通信速度を飛躍的に高めたデジタル技術革命に基づく経済政策であろう。

グローバリゼーションと教育は相互に関係する。この問題は、「グローバリゼーションが教育に与える影響は何か？」および「教育がグローバリゼーションに与える影響は何か」という、少なくとも2つの方向から考えることができる。

1970年代のグローバリゼーションは、多くの工業先進国において、経済成長の鈍化、石油危機、高まるインフレ、公共支出への圧力の中で広がってきた。世界各国で、成長を推進しようとする通貨主義の新自由主義政策が導入された。「サッチャリズム」「レーガノミクス」と言われたこれらの政策は、数ある中でも金融の自由化、国営企業の民営化、財政支出の削減などの施策を推進した。1960年代から1970年代初めにかけて国際金融機関は、高い輸入に代えて食料やモノを国内で生産する「輸入代替」として知られる戦略を貧しい国々に助言したが、今やこの政策を転換して、経済や貿易の自由化を提言するようになった。そして、グローバル資本主義の新たな局面の幕開けとともに、世界経済の再編が始まった。

### 講演の4つのテーマ

まず「グローバリゼーションは教育にどのような影響を与えたか」について考えたい。日本と経済的文化的に深い関係を持ち、1970年代末から経済のグローバル化戦略を取るようになったスリランカを例に挙げる。それに続く分析は、コロンボ大学のシリ・ヘティゲ教授 (Prof. Siri Hettige) との共著で最近出版した *Globalisation, employment and education in Sri Lanka: opportunity and division* (スリランカにおけるグローバリゼーション、雇用、教育：機会と格差) に基づくものである。

次に、これに対して「国のグローバリゼーションを助ける教育条件とは何か」を考える。ここでは、1960年代から70年代にかけて国際金融機関が提唱していた方向とは逆に、急速にグローバル経済に統合していった「東アジアの虎」と呼ばれる4カ国の経験を検討する。

第3に、再びスリランカのケースに戻る。スリランカは1950年にはほとんどのアジアの国々より進んでいたが、なぜ経済的にそれほど立ち後れてしまったのか。

最後に、グローバリゼーションのコンセプトの主流となっている考え方に疑問を投げかけ、望ましい開発のためのプログラムに「持続可能性」のコンセプトをより積極的に取り入れる必要があるのではないかについて問い、教育の意味を考えたい。

**質問1：**グローバリゼーションはスリランカの教育にどのような影響を与えたか。1948年に政治的に独立したスリランカは、1950年代中頃から1970年代中頃まで提唱された「輸入代替」の戦略を踏襲した。スリランカは経済的な自立を目指して、農業生産や工業生産を国営化した。教育については、様々な学校を一つの国家制度に統一し、国家試験制度を強化し、教科シラバスやカリキュラムをかつての宗主国イギリスのものから切り離そうとした。そして私立学校や宗教団体が設立した学校は国立学校になった。1960年代末、若者の社会不安、非常に低い経済成長、教育を受けた若者の非常に高い失業率によって若者の反乱が広がり、1970年代に左派系の政権が崩壊した。それに代わって1977年に右派の政権が樹立されると、「輸出主導の自由化」による開放経済政策が導入され、為替管理の緩和、輸入規制の撤廃、外国投資の促進、自由貿易地区の制定などにより、輸出産業の振興が図られた。これらはすべて、急速にグローバル化する経済にスリランカが参入しようとするものだった。

全体的に、スリランカのグローバリゼーション、雇用、教育に関する物語は、「成長」と「格差」の物語、すなわち、新たな機会の創出と継続的に拡大する格差の物語である。

- 自由化以来、経済はかつてないほど成長している。
- 世帯あたりの平均所得は増加しているが、所得の分配は悪化している。
- 失業率は下がったが、女性の失業率は高いままで、男性の2倍である。
- 若者は失業している者より就業している者が多い。若者は農業より製造業やサービス業に就く者が多く、民間企業に就職している者が多いが、正規の雇用より臨時的な雇用が多い。
- すべての社会階級で、国内外の資格を取得する人々が増えている。しかし、より高収入の労働市場につながる、外国が実施する資格試験を受ける人々は、より裕福な階級の人々のほうが多い。
- 若者が教育や職業に望むレベルは、以前よりはるかに高くなったが、多くの人々は希望をかなえられないでいる。
- 教育や職業の希望レベルと社会階級は、依然、強い相関関係にあるが、教育よりも職業に対する希望の方が、社会階級との関係が強く表れている。つまり、若者の希望を自由化の前後で比べると、中流階級と下層階級の格差が拡大している。
- すべての社会階級において就学率は上昇しているが、科学、IT、英語へのアクセスや、中等教育を修了後に、自由化された経済の中で、新しい民間の仕事に就職できる機会は、都市部に集中している。
- 最後に、多くの学科において成績が上昇しているようにみえるが、異なる種類の学校間格差は大きいままである。また、言語媒体や地域による差や、男女の差も大きい。ほとんどの科目で、女子の方が男子より成績が良い。

**質問2：**国々のグローバリゼーションを促進する教育的条件は何か。すでに1960年代、70年代までに、香港、韓国、台湾、シンガポールは工業製品の輸出を推進する経済政策に乗り出した。輸出型経済が世界を救うと国際金融機関が世界的に提唱するようになる、はるか以前のことである。グローバリゼーションを成功させたこれらの国々で採用された教育戦略から、私たちは何を学べるか。まず私たちはこれらの国々に共通する開発の特徴を、次に共通する教育の特徴を考察する必要がある。

#### 共通する開発の特徴

- 工業製品を中心とする輸出志向
- 「高い付加価値」を常に目指す活動に適応
- 外貨の利用
- 高いレベルの投資や貯蓄
- 農村部の地主階級の不在

- 農村部の生産性が向上
- 所得の均等化の拡大
- 情報パラダイムへの適応と採用

#### 共通する教育の特徴

- 教育を受けた、安価で生産性が高く訓練された労働力の安定供給
- 高レベルの基礎教育と識字率が経済成長に先行
- ジェンダーに公平なアクセス
- 公教育の公平な支出
- オープンで競争的かつ概ね実力主義の教育
- 国民の強い連帯感とアイデンティティの育成

**質問3：** なぜスリランカはアジアの虎に後れたか。19世紀末から20世紀初頭のスリランカの経済は、植民地経済が輸出主導型の経済であったにもかかわらず、世界市場に非常によく統合されていた。主に茶やゴムなど、プランテーションの作物の輸出に支えられた経済によって、シンガポールとマラヤ連邦の一部を除いた他の南アジアの国々や多くの東南アジアの国々に比べて、スリランカの生活水準ははるかに高かった。そして、教育指標の成績も非常に良くなった。スリランカの人々は、1948年の独立直後にリー・クワンユーがスリランカを訪問したときに「スリランカはシンガポールの発展の模範である」と語ったことをしばしば思い出す。スリランカはアジアの虎からはるかに後れてしまったが、1950年には経済的にも社会的にも他国よりずっと進んでいた。スリランカが優位を強化できなかったのには、次のような要因が考えられる。

- 輸入代替政策、低い成長率、教育を受けた人々の高い失業率
- 少ない外貨や国内貯蓄、投資
- 非効率な公共部門
- 政策実施の度重なる政治利用
- 高等教育・技術教育・職業教育の後れ
- 人種分離教育による民族のアイデンティティ強化と国民としてのアイデンティティの弱体化

**質問4：** グローバリゼーションに関する論文の多くは、経済成長を根本的な目標においている。また公平さの側面も徐々に注目されるようになり、成功と言えるグローバリゼーションとは、社会の人々に公平な所得をもたらす経済成長と定義されるようになった。私は、この成功と言えるグローバリゼーションの概念について同僚と共同で研究し、3つ目の概念の「平和」を提唱した。スリランカのグローバリゼーションの過程を分析すると、1970年代末以降、成長とある程度の公平さがもたらされた一方、何千人もの命が奪われた内戦があった状況を憂慮せざるを得ない。内戦状態にある国は、グローバリゼーションが「成功」したかどうか、どのように判断できるのか。

しかし「持続可能な」成長という概念によって、開発を目指すときに新たな側面が加わる。グローバリゼーションの戦略は、長期的な将来まで持続可能でなければ、成功と考えるべきではない。グローバリゼーションの戦略は、天然資源や環境資源が枯渇して将来の世代のニーズを犠牲にするなら、成功と考えるべきではない。輸出型の成長戦略は必ずしも、国内で消費する食料や水を生産するために必要な国の天然資源を保全するだけのものではない。それらの資源は、現在だけでなく将来にわたって人々が生存するための最も基本的な資源と考えなければならない。そのような開発の概念に沿った教育戦略とは何かを討議する必要がある。